様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　　元 年　　６ 月　　７ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2016～2018
課題番号：１５ＫＫ００６２

研究課題名（和文）スカンディナヴィアとその影響圏におけるルーン石碑の総合研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）A study of rune stones in Scandinavia and its related areas(Fostering Joint International Research)

研究代表者
小澤　実（OZAWA, Minoru）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：９０４６７２５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,500,000円
渡航期間：　12ヶ月

研究成果の概要（和文）：ルーン石碑という死者記念石碑に注目し、９世紀から１１世紀にかけてのスカンディナヴィア人が、同時代の国際政治秩序形成や文化変容にどのような形で寄与していたのかを明らかにすることが本研究の目的である。当該目的を国際水準で遂行するために、日本において複数回の国際シンポジウムを開催し、研究期間中に１２ヶ月にわたりオックスフォード大学グローバルヒストリー研究所に滞在し、当該施設に所属する研究者と共同研究を行なった。その結果としてスカンディナヴィア人が、船舶や海域や河川という自然環境を他集団よりも有利な形で利用し、ユーラシア西部における政治秩序の形成や文化変容に大きく関わっていたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果により、通例ヴァイキングと呼ばれる９世紀から１１世紀にかけてのスカンディナヴィア人が、船舶を駆使することで海域や河川で優位に立つことにより、北大西洋世界からユーラシア西部に至る独自の交易ネットワークを形成し、各地の外交システムや国家形成などに直接的間接的に関与することで、北ヨーロッパ、ロシア、ビザンツ帝国、イスラーム世界などの歴史展開に大きな影響を与えていたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study aims at elucidating, on the basis of the analysis of rune stones, how the Scandinavians contributed to the development of political order and cultural transformation in a western part of the Eurasian continent in the 9th to the 11th centuries.To do so efficiently and internationally, I held several times of international workshops in Japan and stayed as a visiting scholar at the Oxford Centre for Global History for a year to cooperate with the researchers who are interested in the Global Middle Ages. As a result, it was revealed that the Scandinavians used ships and the maritime and riverine environment more advantageously than other contemporary social groups and were greatly involved in the formation of political order and cultural transformation in the western part of Eurasia.

研究分野：北欧中世史

キーワード：ヴァイキング　スカンディナヴィア　フランク王国　イングランド王国　ロシア　ビザンツ帝国　イスラーム世界　海域

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

本研究の背景として、基課題である科研費若手研究 A「スカンディナヴィアとその影響圏におけるルーン石碑の総合研究」（H25-28）を加速度的に進展させる必要が要請されていたことを前提として共有したい。基課題は、（１）スカンディナヴィア三国（デンマーク・ノルウェー・スウェーデン）とその影響圏（ブリテン、北大西洋、大陸、ロシア、ビザンツなど）におけるルーン石碑の分布・機能・特徴を調査し、（２）ルーン石碑がその建立者の行使する政治権力とどのような関係にあったのかを明らかにし、（３）そのようなルーン石碑を権力要素とするスカンディナヴィア人が、その周辺世界（ラテン・カトリック世界、ギリシャ正教世界、イスラーム世界、遊牧民国家）と交渉し影響圏を拡大する中で、同時代の国際政治秩序形成や文化変容にどのようなかたちで寄与し、また逆に寄与を受けていたのか明らかにすること、を目的とした。

２．研究の目的

本研究は、上記目的のうち、（３）スカンディナヴィアならびにその影響圏と外部世界の関係の解明を加速させることに重点を置いた。というのも、（３）は近年の歴史記述に大きな影響を与えているグローバルヒストリーに関わる内容であるが、本研究が解明を試みる中世スカンディナヴィア人の活動を、そのグローバルヒストリーの枠組みの中で十分に論じた研究は存在しないからである。しかし、スカンディナヴィアをヨーロッパとユーラシア世界の結節点となる境界領域と理解し、移動するスカンディナヴィア人の歴史的役割を明らかにすることで、従来のグローバルヒストリー記述の見直しが期待される。そのため、以下の内容をさらなる目標とした。

①中世（５世紀から 15 世紀）のグローバルヒストリーに関わる研究状況の調査を行う

②そのなかに、研究代表者の研究成果により得られたスカンディナヴィア人の活動を位置付ける

３．研究の方法

上記目的を達成するために以下の方法で研究を行なった。

（１）個人による調査

そもそもグローバルヒストリー研究のなかでさほど進展しているとは言えない、中世グローバルヒストリーの研究現状について正確に把握する必要がある。研究代表者は、10・11 世紀を中心にスカンディナヴィア世界が中世ヨーロッパ世界とユーラシア世界をつなぐ役割を果たす認識を深めることのできる可能性のある近年の研究を調査し、後述する共同研究での報告のために必要な論点の抽出に努めた。なおその成果は、共同研究者の Catherine Holmes 博士の論考とともに、本年度中に日本語で刊行される予定である。

（２）専門家との共同作業

本研究を進めるためには、すでに基課題でも試みているように、スカンディナヴィア以外を領域とする専門家と共同作業をする必要がある。そのため、本研究では、日本において複数回の国際シンポジウムを開催し関連テーマの論点を深めるとともに、2018 年 3 月から１年間、オックスフォード大学グローバルヒストリー研究所に滞在することで、現地研究者との共同作業を行い、課題内容を進展させた。その際、当該施設のファシリティを十分に活用するだけではなく、研究代表者は欧州の様々な研究施設（リーズ、リェイダ、レイキャヴィーク、カン、ウィーン、ヨーク）で報告を行い、多様な背景を持つ中世史学者とともにディスカッションを

行なった。とりわけ 2019 年 2 月には、本研究の一つのまとめとして、共同研究者らとともに、Medieval Zomia: Stateless Spaces in the Global Middle Ages（中世のゾミア：グローバルな中世における国家なき空間）という 2 日にわたるワークショップを開催した。このワークショップでは、ヨーロッパのみならずアメリカやアジアにおいて「中世」とされる時代を研究する１５名が報告を行ったが、うち報告者を含む５名は日本人研究者であった。特筆すべきは、東アジアやモンゴル帝国など、イギリスでは研究層の薄い地域の知見を日本人研究者が紹介することによって、イギリス側と日本側が相互に成果を共有することができた点である。

４．研究成果

本研究の成果を要約する。

（１）スカンディナヴィア人は、１０−１１世紀にかけて、それ自体の国家を形成するとともに、その周辺地域において、彼らの強い影響のもとに、アイスランド、イングランド北部、ノルマンディ、ロシアといった地域に政治的空間を現出せしめた。こうしたスカンディナヴィア人の政治活動は、北ヨーロッパにおける国際関係に大きな影響を与え、１２世紀以降のヨーロッパ秩序を形成する礎の一つとなった。

（２）以上のようなスカンディナヴィア人の活動は、彼らが船舶を巧みに用い、海域や河川での活動を多集団に対して有利に進めることができたためでもある。そのような活動が可能となったのは、日常的に海域のなかで生活を行なっていたスカンディナヴィア人が、船舶共同体と名付けるべき、船舶を中心とした共同体を北欧現地において形成していたからである。

（３）（２）を認識する中で、研究代表者は、海域・河川・島嶼といった観点から、スカンディナヴィア人の活動を理解する必要性を確認した。

５．主な発表論文等

（研究代表者は下線）

〔雑誌論文〕（計　11　件）

①小澤実、2017 年度公開シンポジウム「大久保利謙と日本近代史研究　家族・学問・教育」、立教大学日本学研究所紀要、17、査読無、2018、3-7 頁

②小澤実、ハイジの国の中世、工芸青花、10、査読無、2018、53-57 頁

③小澤実、書評：『〈驚異〉の文化史　中東とヨーロッパを中心に』（名古屋大学出版会、2015）、西洋史学、266、査読有、2018、71-73 頁

④小澤実、ヴァイキング船と船舶共同体、西洋史論集、55、査読無、2018、4-7 頁

⑤小澤実、書評：海老澤衷・近藤成一・甚野尚志編『朝河貫一と日欧中世史研究』（吉川弘文館、2017）、史苑、78-1、査読無、2018、278-284 頁

⑥小澤実、解題「キャサリン・ホームズ「変容するビザンツ？グローバルヒストリーの時代におけるビザンツ研究の新潮流（600-1500）」」、思想、1118、査読有、2017、87-88 頁

⑦小澤実、中世の修道院、工芸青花、8、査読無、2017、43-45 頁

⑧小澤実、2016 年度公開シンポジウム「前近代東アジアにおける怪異と社会　テクスト・文化・自然環境」、立教大学日本学研究紀要、16、査読無、2017、3-7 頁

〔学会発表〕（計　11　件）

①OZAWA, Minoru, Making Communities through Ships in Late Viking Age Scandinavia,

Medieval Zomia: Stateless Spaces in the Global Middle Ages, Oxford (Great Britain), 2019 年 2 月 9 日

②OZAWA, Minoru, Medieval European history in a maritime and Eurasian perspective: The case of Viking Age Denmark, Institut für Mittelalterforschung, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Vienna (Austria), 2018 年 12 月 7 日

③OZAWA, Minoru, The Social Function of Rune Stones in Viking Age Denmark, Vikings et le Japon, CRAHAM, Caen(France), 2018 年 11 月 9 日

④OZAWA, Minoru, Eddas, Sagas, and Vikings in Postwar Japanese Culture, Vikings et le Japon, CRAHAM, Caen (France), 2018 年 11 月 8 日

⑤OZAWA, Minoru, Translation Movement of Icelandic Sagas in Postwar Japan: From Yamamuro Shizuka to the Present, The 17th International Saga Conference, Reykjavik (Iceland), 2018 年 8 月 17 日

⑥OZAWA, Minoru, Commemoration Strategy of the Jelling Dynasty in the Tenth and Eleventh Centuries, International Medieval Congress in Leeds 2018, Leeds (Great Britain), 2018 年 7 月 4 日

⑦OZAWA, Minoru, Formulation of emotional communities through stones: some thoughts on the social role of rune stones in Viking Age Scandinavia, The 8th International Medieval Meeting in Lleida, Lleida (Spain), 2018 年 6 月 27 日

⑧小澤実、大久保利謙と 1950-60 年代の立教大学史学科、大久保利謙と日本近代史研究　家族・学問・教育、立教大学（東京都豊島区）、2017 年 12 月 9 日

⑨小澤実、ヴァイキング船と船舶共同体、バイユーの綴織（タペストリ）の世界（九州西洋史学会大会）、熊本大学（熊本市）、 2017 年 12 月 2 日

⑩ OZAWA, Minoru, Some Remarks on Medieval Eurasian Trade Networks, Slaves, Merchants and the Powers in Medieval Eurasian Trade Networks, Rikkyo University (Tokyo)、2017 年 7 月 22 日

⑪OZAWA Minoru, Why Did a Viking King Meet a Pope?: Political and Commercial Background of Cnut's Journey to Rome in 1027, Medieval Papacy: Governance, Communication, Cultural Exchange, Rikkyo University (Tokyo), 2017 年 2 月 18 日

〔図書〕（計　9　件）

①ヒロ・ヒライ（編）小澤実他、ルネサンス・バロックのブックガイド：印刷革命から魔術・錬金術までの知のコスモス、工作舎、2019、277 p.（124-125；126-127；158-159）

②長谷川修一・小澤実（編）、歴史学者と読む高校世界史、勁草書房、2018、288 p.（ii-viii；25-44）

③大城道則（編）小澤実他、図説古代文字入門、河出書房新社、2018、128 p.（79-85）

④熊野聡・小澤実、ヴァイキングの歴史、創元社、2017、306 p.（283-306）

⑤ユーフォリアファクトリー（編）小澤実他、Transit37 号（特集アイスランド）、講談社、2017、188 p.（52-55）

⑥北欧文化協会他（編）小澤実他、北欧文化事典、丸善出版、2017、650 p.（160-161; 168-169）

⑦小澤実（編）、近代日本の偽史言説：歴史語りのインテレクチュアル・ヒストリー、勉誠出版、2017、392 p.（3-17）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

研究協力者

〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕
研究協力者氏名：キャサリン　ホームズ
ローマ字氏名：Catherine Holmes
所属研究機関名：オックスフォード大学グローバルヒストリー・センター
部局名： 歴史学部
職名：Associate professor

〔その他の研究協力者〕
研究協力者氏名：ドミニク・ザクセンマイアー
ローマ字氏名：（Dominic Sachsenmaier）

研究協力者氏名：秋田茂
ローマ字氏名：（AKITA Shigeru）

研究協力者氏名：ハラルド・ミュラー
ローマ字氏名：（Harald Mueller）

研究協力者氏名：ゲオルク・シュトラック
ローマ字氏名：（Georg Strack）

研究協力者氏名：トマス・スミス
ローマ字氏名：（Thomas Smith）

研究協力者氏名：アレッサンドロ・シンベーニ
ローマ字氏名：（Alessandro Simbeni）

研究協力者氏名：四日市康博
ローマ字氏名：（YOKKAICHI Yasuhiro）

研究協力者氏名：中村翼
ローマ字氏名：（NAKAMURA Tsubasa）

研究協力者氏名：マレク・ヤンコヴィアク
ローマ字氏名：（Marek Jankowiak）

研究協力者氏名：フロセル・サバテ
ローマ字氏名：(Flocel Sabaté)

研究協力者氏名：ジェシカ・ノヴァク
ローマ字氏名：(Jessika Nowak)

研究協力者氏名：ヨーン・カール・ヘルガソン
ローマ字氏名： (Jón Karl Helgason)

研究協力者氏名：アルバン・ゴティエ
ローマ字氏名： (Alban Gautier)

研究協力者氏名：フィリップ・ビュック
ローマ字氏名： (Philippe Buc)

研究協力者氏名：ナオミ・スタンデン
ローマ字氏名： (Naomi Standen)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。